

平成17年度 公開講座の概要



埼玉大学長 **田岡 三生**

地域の皆様のための埼玉大学公開講座も、今年で16回目を迎えました。今回は「あの名作をもう一度 —文学の新しい楽しみ方—」と題して、多くの人々に親まれてきた古今東西の名作を、文学研究・教育の最前線に立つ講師陣が新たな視点から読み解きます。この講座で読書の愉しみと意義を再発見してみませんか。皆様のご参加を心よりお待ちしております。

第1回

10月15日(土)

フェアブル『昆虫記』と これからの自然環境

●埼玉大学教養学部教授 **奥本 大三郎**

フェアブル『昆虫記』の大半の部分は、19世紀の後半に書かれました。それ以前の、昆虫の形態ばかりをできるだけ精密に描出、記録し、分類しようという博物学から脱して、フェアブルは虫を生きたものとして捉え、その行動の謎を解明しようと試みました。そうした研究は必然的に環境の中での生物の生き方を探るという方向に進んでいきます。いわゆる動物行動学は20世紀の後半から発達するようになりましたが、その一つの模範となったのはフェアブルの手法だったと思われる。今回の講座では、フェアブルがどうしてこのような研究を想いついたか、またこれが今の私たちの生活とどう関連するかについてお話してみたいと思います。

第2回

10月22日(土)

アンデルセンの文学 —『雪の女王』と『人魚姫』を中心に—

●埼玉大学教養学部教授 **安達 忠夫**

今年はアンデルセンの生誕二百年にあたります。平易なことばと鮮明なイメージによって描かれた童話作品の数々は、すでに百数十年間読みつがれてきたわけですが。しかしデンマークの研究者が「アンデルセンは、みんなが読んでいるのに、だれもその本質を知らない作家である」と述べています。いくつかの童話を手がかりに、北欧的なほの暗い光につつまれたアンデルセン文学の、優しさと厳しさの秘密にふれてみたいと思います。

第3回

10月29日(土)

ヒアシンズハウスに夢を託して —立原道造と神保光太郎—

●さいたま文学館主任学芸員 **加藤 かな子**

わずか24歳8ヶ月で生涯を終えた詩人・立原道造。立原は将来を囑望された建築家でもあり、敬愛する詩人・神保光太郎の住まいの近く、別所沼（現・さいたま市）のほとりに、週末を過ごすための別荘—ヒアシンズハウス（風信子荘）の建築を夢見ていました。今回は二人の交流にスポットをあてるとともに、神保が立原を追悼するために書いた文章や詩を紹介しします。

第4回

11月12日(土)

シラーの「歓喜に寄せて」 —歓びの歌をめぐる幾多の苦悩のものがたり—

●獨協大学外国語学部助教授 **矢羽々 崇**

皆さまの中には、ベートーヴェンの「第九交響曲」の合唱を歌われた経験のある方も多いのではないのでしょうか？その最終楽章には、シラーの詩「歓喜に寄せて」が使われています。このシラーの詩は、人類の友愛を歌った壮大な作品として知られている一方で、実は全体を通して読むと「変な詩」でもあります。この不思議さを足がかりにして、シラーの詩とベートーヴェンの交響曲、そしてその後の受容の歴史をたどります。なぜ「第九」が今の日本でこんなにポピュラーなのかを考えてみましょう。

第5回

11月19日(土)

古典は読み切れるか？ —『徒然草』序段を例として—

●埼玉大学教養学部教授 **武井 和人**

『徒然草』は、中学や高校の教科書で取り上げられているものですから、ややもすると、平易な内容の作品と受け取られる向きもあるでしょう。また、一通りの注釈的な研究は完成して、研究の最先端は、より遠くより深いレベルに達していると、“何となく”理解されているかもしれません。けれども、実際は、全く異なります。それが証拠に、教科書で必ずといって良いほど採択されている“あの”序文ですら、本当に「読み切れているか」と問われれば、甚だ遺憾ながら「否」と答えざるを得ないのが、研究状況の実情なのです。皆さんにも、是非、この《解釈の不可能性》を実体験して欲しいと願う者です。

きりとり線

受講申込書

埼玉大学公開講座「あの『名作』をもう一度 文学の新しい楽しみ方

【申込日】平成17年 月 日

氏名: ふりがな _____ 年齢: _____ 才 _____ 性別: _____ 男・女 _____
住所: _____ 職業: _____
電話番号: _____

〒338-8570 さいたま市桜区下大久保255 埼玉大学学生部全学教育課 TEL: **048-858-3787** FAX: **048-858-3705** Mail: kohkai@post.saitama-u.ac.jp

※必ず、電話にて予約申込みをしてから、受講料を納付願います。